

草筆木筆で描く不思議のらかんたち

# 草画帖

65



らん

号



鳥瓜号です、  
夏の夜の幻想的な白い花。  
晩秋に真っ赤に熟れる実。  
種は大黒天、打出の小槌、玉章、  
蟪蛄の頭部などに例えられます。  
雀瓜、沖繩雀瓜も。

夕日より手繰り寄せたる烏瓜



烏瓜筆。夜空にはカラスウリのように真っ赤な星が幾つか。



烏瓜筆。遠い夏、スズメガのように神秘的な花を巡った。



うら枯れていよいよ赤し烏瓜 炭太祇



をどりつつたぐられて来る烏瓜 下村梅子  
赤い実が空中で跳ねて、大黒様が打出の小槌を振る。

## 幻の森

幼い杉の木に

雀瓜の蔓が絡みつき

秋には小さな白い実を

幾つもいくつもぶら下げる

天然の

瓔珞ようらくをまとった木

この山に

一匹の狐が棲む

麓には

烏瓜の繁茂する藪がある

このあたり

山もうつろう



ある山は公園となり

ある山は病院が建ち

ある山は戦時中

洞穴工場が稼働した

ある山の採石場は廃れ

ある山は蝸牛形の寂寥に立つ

そうだった

古老の榎が病んで

辛夷こふしが花を掲げて

青鷗あおじが歌を捧げたのはここだ

裏徑に回れば

もう一つの烏瓜の名所がある

この冬も

瑠璃色の小鳥が独り暮らしている



烏瓜筆。しぐるるやいつまで赤き烏瓜 正岡子規



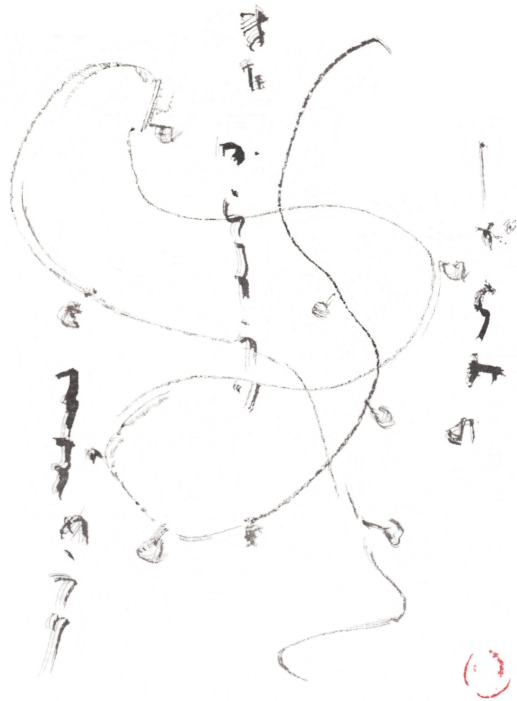
烏瓜筆。わがこころのカラスウリ。その神秘的な花と実。



沖縄雀瓜筆。夢を喰う獺のこどももまた瓜坊である。



雀瓜筆。風の吹く頃、言の葉は紅葉し、言の実は熟れる。



雀瓜筆。からむもの、からまれるもの、渾然とした世界。

## 草話

晩秋から冬に入つての蕭条とした風景、枯れ枯れの藪や林に烏瓜の赤い実だけがそここにぶら下がっている。赤い色は寒々とした心象を温める。実は手の届かないところにあるが、蔓は身近にある。誰しも引つ張つてみたくなるのだろう。

つる引けば遙に遠しからす瓜 酒井抱一

蔓切れてはね上りたる烏瓜 高浜虚子

蔓引けば青きが出でぬ烏瓜 石井露月

烏瓜引きし分だけ景色減る 後藤比奈夫

子を<sup>な</sup>生さで空から手繰る烏瓜 鍵和田釉子

かく古今の俳人も烏瓜の蔓を引いてきた。

\*

烏瓜の絡んだ家に住んでいたことがある。ある夏の夜、となりの駐車場に小型望遠鏡を出して星を覗いていた。一息ついて一服するための火をつけた目に、壁のなにやら白いものが映った。近寄つて確かめると烏瓜の花が幾つか咲いていた。赤い実の方は先に知つていて、花の方は初めて、図鑑で見ているとおりの奇妙な花。雄の株だったので、その秋赤い実は着かなかつた。おかげでひつそりと、知る人ぞ知るで済んだ。もともと藁が絡んでいた板塀なので誰も気が付かなかつた。

街中なのに、烏瓜を咲かせ、裏庭には藪茗荷や姥百合がひよっこり生える山家のような家が懐かしい。



カラスウリの種

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第65号 2024年11月30日 泉井小太郎編集 六角文庫発行

〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008